

IDF World Diabetes Congress 2022 参加体験記

岐阜大学医学部附属病院 糖尿病代謝内科

川島優衣

1) はじめに

はじめまして。岐阜大学医学部附属病院 糖尿病代謝内科の川島優衣と申します。私は2020年に岐阜大学医学部を卒業して2年間の初期臨床研修を終えたのち、2022年の4月より糖尿病内科学を専攻して現職での勤務を開始しています。今回、2022年12月にオランダ・リスボンで開催されたIDF World Congress 2022にオンライン参加する機会を頂きましたので、体験記として報告させていただきます。

2) 参加まで

11月頃、「国際学会のオンライン参加に補助が出るらしいけど一緒にどう?」と、同門の今井理沙子先生にお声がけいただいたのが契機でした。リスボンでIDFが開催されることはぼんやりと把握していましたが、卒業して医師になったちょうどその時期からコロナ禍にどっぷりの私にとっては、日本国内の学会に現地参加できるだけでもありがたいことで、海外での学会などというものは遠い出来事でした。「よく分かりませんが先生も参加されるなら…」というふんわりとした心持ちで参加を決め、登録のためIDFのホームページにアクセスしてまず驚いたのが、日本国内の学会とは全く毛色の違うカラフルでポップなホームページのデザインでした。簡単な参加登録だけの作業にGoogle翻訳にお世話になりつつ四苦八苦していると、『どの敬称を使用しますか? Dr./Mr./Mrs./Ms.…」という項目が出てきて「海外の学会っぽい!」と少し楽しく思ったことも覚えています。参加費を二重で支払ってしまったかもしれないと冷や汗をかいたりもしつつ、どうにか無事に登録を終え、あとは気楽に学会当日を待つばかりとなりました。

3) IDF World Congress 2022

IDFは12月5日から8日にかけて開催され、セッションはオンデマンドで会期後も配信されていたので、ひと月をかけて気になるセッションをのんびりと視聴することができました。そもそも私は英語での発表を聴いて勉強になるほど理解できるのか?という不安を抱えていましたが、一時停止を繰り返しスライドと睨めっこしているうちになんとか聞き取れるようになりました。英語が母国語ではない話者の英語は比較的聞き取りやすい、というのが今回の一つ目の学びです。

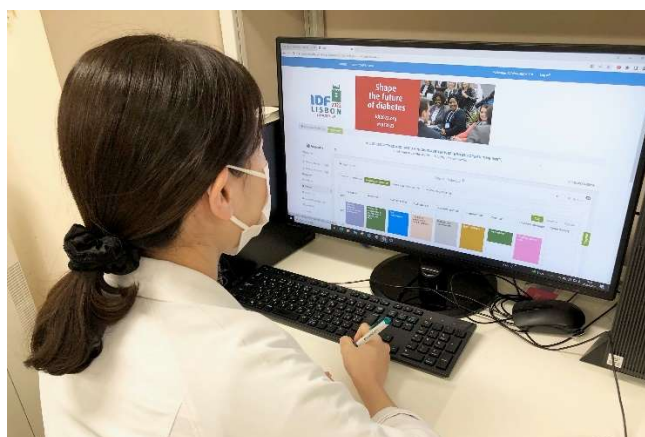
プログラム全体を通しては、「低所得国・発展途上国における糖尿病ケアの提供」「医療アクセスが不十分な集団における糖尿病スクリーニング」「人道危機・災害下での糖尿病ケア」といった、社会医学的な問題にフォーカスしたセッションが非常に多いことが印象的で

した。国民皆保険制度が存在し、健診制度が普及している本邦で糖尿病診療に携わっている中でも、経済的・社会的背景によって医療アクセスの網から零れ、取り返しのつかない状況まで合併症の進行を許してしまった例にはしばしば遭遇し、そういった層をいかに取りこぼさず、医療に繋ぎ止めておくかは大きな課題だと感じています。そういった点で、インドの農村部に居住する人々を対象に遠隔医療を使用して糖尿病の合併症スクリーニングを実施した報告や、リスボンにおけるフットケア家庭訪問プロジェクトの報告は非常に興味深く、物理面で医療アクセスの悪い人々や、コロナ禍の影響で定期通院が困難になってしまった人々へのアプローチとして参考になると感じました。またより日常診療に即した学びとして、AIを利用して個々人に最適化した糖尿病教育プログラムの発表を聴いたことで、自身が日々行っている疾病についての説明や教室がその受け手の特性を考慮できているか、画一的な通り一遍の内容になっていないかについて改めて省みる良い機会になりました。

また、ラマダン(断食)月中の糖尿病患者の治療や血糖モニタリング、少数民族の文化的背景に応じた栄養指導の方法といった、文化・宗教と糖尿病ケアの関係を論じたセッションも非常に興味深いものでした。ディベート形式のセッションなども目新しく、こういった多面的な議論に触れることができるところに国際学会ならではの面白さを感じます。

4) おわりに

何とはなしにハードルの高いイメージを持っていた国際学会ですが、オンライン参加では気軽に世界的な最新の知見に触れることができ、非常に良い経験になりました。今回きっかけをいただいて、今後の参加のハードルもぐっと低くなったように思います。普段の日常診療から少し視野を広げる良い機会として、今後もこういった場に積極的に参加していきたいと考えています。



(写真)